

「言葉の楽譜」の奏で方

■原則

- ・句読点、棒線はリズム作りのために存在している。

■ルール

- ・読点「、」及び、句点「。」は休止符。

- ・棒線は、前の語と区切らず続ける（句読点よりも優先される）。

【例】 「今日は、いい天気」

「きょうはいいてんき」と間をあけず、押すように発声する。

- ・「Ⅱ」は、紙面が足りず改行せざるを得なかった印。
表現は行をまたいで続いているので注意すること。

重奏の際、次の語頭を置く位置に「→」が連動している場合もある。

- ・子音のみ聞いたら入る（**半角下げ**）箇所を見逃さないこと。

【例】 A 見つけた。

B 見えた。

Aの最後の「たⅡTA」のTを聞いたら、
Bは「見えた」と入る。

identshi195 朗読研究室

- 言葉の楽譜と声の未来 -

オンラインサロン
特典テキスト 01

* 本原稿の無断転載・複写・上演・放送を固く禁じます



奏でる、言葉の楽譜。

identshi195

朗読キネマ

登録商標第 6241074 号

言葉の楽譜

登録商標第 6232812 号

● 一人語り

光源氏 黄昏のしじま、五月雨に滲むは鳥辺山。

去りし人を偲ぶ現世に、残されたのは当て知らぬ我が道。

長雨が止み、珍しく晴れ間を見せた夕暮れ。

中川の辺を過ぎる一台の牛車があった。

からからと回る車に揺られ、源氏は物見窓から外を見やる。

風薫る木立、ホトトギスの囀り。

あの方は今、どうしているだろうか

● 二人語り

光源氏 御簾隔て、彼方。

この方を今、どうしても射止めたい。

御息所 決して、
絆されてはならない。

「源氏の君、あなたはまだお若くていらっしゃる。

枯れた枝より、可憐な花を愛でなさいませ」

光源氏 憂いを帯びた麗しい声。

私は弾かれるように御簾に手をかけ、
踏み入った。

御息所 「源氏の君、
何をなさいます！」

光源氏 想像した通りの
美しい方。

御息所 抱きとめられ、
息ができない。

光源氏 「私は、あなたという花を愛したい」
御息所 囁きが
耳に熱い。

光源氏 身を離そうとする力は弱かった。

麗しい人が、胸の中から私を見上げる。

御息所 「あなたは今、春の月に惑わされているだけのこと。
いつか終わる恋ならば、始まらない方がいいのです」

光源氏 濡れた瞳が、愛おしい。

御息所 大きな手が 頬を包む。

光源氏 「ならば私は、永遠にあなたのものに」

御息所 眩しさに、目を閉じる。

引き寄せられるように、唇を奪った。

御息所 奪われたのは、私の心。

信じてよいのですね、光る君――。

● 四人語り

巫女 弓の音^{おと}。響きの中に、何かの気配が混じりはじめた。

けれどまだ。姿までは見えない。あと僅か、もう少し。

横川聖 と、篝火が大きく揺れた。

咄嗟に当たりを見張るも、何も見えない。

光源氏 鼻先に、くちなしの香り。

巫女 「こちらです！」

横川聖 巫女を見やる隙もなく、

葵上の叫び声が、夕闇を切り裂いた。

御息所 光る君、
今いずこ。

巫女
葵上が真つ白な帳をかき分け、源氏へと手を伸ばす。

光源氏
光る君、今いずこ。

御息所
永遠に、私のものに。

横川聖
重い腹も構わず、褥から這い出す葵上を、女たちが支える。

光源氏
うわ言の中、瞳を潤ませ私を求める葵上に、刹那、

朝を待たずに消えた儚き花が過った。

もう、あんな思いなどしてなるものか。

私は、葵上を強く、抱きとめた。

御息所
光る君、今いずこ。